

決断すること

2007年6月、アメリカ、ニューヨーク州、ニューヨーク近郊、ニューヨーク市に住むティーチャーとリーダーのためのワークショップにおけるティム・ジャキンズの話

みなさんはRCのリーダーとして、自分を悪く思わないと決断することについてそれぞれ考えてきたと思います。これは興味深いテーマです。そのことについて私が話し、それについてみなさんが考えることもできます。しかし、なかにはそれを自分の問題としてとらえない人もいます。そうした人は頭の中で行われているその戦いに目を向けようとしません。その決断をしたときに——いい加減ではなく本気でしたときに（この二つはまったく違います）——直面しなければならない問題に、そうした人は目を向けようとしません。私たちは目の前に立ちふさがる混乱に立ち向かうことが、どれほど大きな戦いになるかわかり見ていく必要があります。それをすることは——そのことを徹底的に考えることは、興味深いことです。

次の段階はその決断が可能かどうかについて考えることです。ほとんどの人はまだそれはできないと考えます。多くの人は何かを決断するのに苦労します。私たちは揺れ動いていて、ものごとを行き当たりばったりに行います。私たちは無計画です。決断をしません。自らの指針となるものを持っていません。私たちは自分を前に進ませるための方針を定めてきませんでした。社会は私たちが方針を持たず、場当たり的で近視眼的であることを求めます。そのために私たちはつい押し流されてしまいます。再刺激が起きると抑圧や搾取が押し進める方向につい流されてしまいます。

ここを取り戻すということは、ものごとを注意深く考え、何が本当であるかを見つめることです。それは自分の抱えている傷や抑圧から目をそむけてしまおうとすることについてセッションすることです。そして、そうした傷や抑圧が自動的に消えてなくなり、それらに取り組みなくても自分自身の生き方ができるようになりたいと願うことについてセッションすることです。私たちは直面すべき問題を見つめ、セッションし、傷と戦う決断をすることについて考えることができます。

これまで変えられる兆候をまったく見いだせなかったことに対して、どのように決断し、取り組むことができるのでしょうか？ 意味ある勝利を手にするのを、私たちは社会からほとんど許されてきませんでした。社会は非常に注意深く私たちを落胆させ、おとなしくさせつづけます。しかし、私たちは自分の戦いについて考え、勇気をもって言うことができます。「よし、不可能と思えることに挑戦したらどうなるか見てみよう」可能かどうかはやってみなければわからないかもしれません。もし傷が大きすぎてそのことを直視することができなかつたならば、勢いよく助走をつけてそれにぶつかり、揺さぶりをかけられるかどうか試すことさえできなかつたかもしれません。揺さぶるだけで十分かもしれないのです。ものごと強く揺さぶりをかければ壊れます。すべてを一度に行う必要はありません。耐性を越えて揺さぶりをかけさえすれば、それはばらばらになっていきます。

勇気を取り戻してその戦いを見つめ、引き受けることができますか？ その戦いは頭の中で行われています。どんなことが起きたのであろうと——実際多くの不幸で恐ろしいことが起こりました——それは終わっています。しかし、それによって植えつけられた混乱を振り払おうとする戦いは終わっていません。

いま傷は自分のものです。その傷がどこから来たかは、ある意味でどうでもいいことです。その傷は自分のせいではないとか、正しいことではないとか、そういったこともすべてどうでもいいことです。その傷はいま自分のものです。ただ単に自分のものです。すべての傷——混乱、がらくた、不合理、抑圧、偏見——はいま自分のものです。自分のところに植えつけられたものです。それは自分のものであり、それに対して何かをできるのも自分です。私たちは互いに働きかけ、その戦いに取り組む手助けができる状況をつくろうとしています。混乱が起きたのは過去のことであり、現在は違って、未来はもっと違うだろうということをはっきりさせようとしています。しかし何をやるにしろ、過去に立ち戻り、起きたことや残された混乱に取り組まなければならないのは自分自身です。そしてその混乱には、自分自身について

の混乱もあります。

みなさんは決断できます。決断しなければならないときが来ます。私たちはたくさんのすばらしい選択肢があるとつねに言っています。みなさんはすでにある道を選んでここに導かれてきました。みなさんはここにいます。みなさんはすでにたくさんの選択をしたことになります。残された選択は自分自身についての混乱に対して決断することです。

二度と自分自身のことを放っておいたりしないといつ決断するのでしょうか？ 二度と過去の感情を信じたりしないといつ決断するのでしょうか？ そうした感情をもう持たないというわけではありません。当然持つでしょう。ディスチャージされない限り、そうした感情はすり寄り、襲ってくるでしょう。しかしそれを信じるかどうか、それが過去のものとして認識できるかどうかはみなさん次第です。感情の混乱を知らせる旗がなびけば、それを合図にそれまでディスチャージする機会がなかった感情をディスチャージできます。旗はディスチャージが起きるまでなびきつづけます。

人間のこころは傷を抱えたままいつまでもおとなしくしてはいられません。勇気をもって動き出すために、それはぐずって注目を求め、資源を得ようとします。みなさんは過去に存在した大半の人よりも多くの必要な資源を持っており、それをうまく使ってきました。とてもうまく使ってきました。私が聞きたいのは、それが次に来る戦いを引き受けるのに十分な資源であると、いつになったら気づくのかということです。いつになったら傷を見つめ、勇気をもって尋ねることができるのでしょうか。「その傷に私は立ち向かうことができる？ この次に頭の中でノイズが鳴ったときに、おじけずに傷を見すえ、傷を追いやり、前に進むことができる？」

それをしなければならないときが私たち一人ひとりに来ます。自分のこころを自由に操ることのできる 때가みなさんにやって来ます。

Deciding

プレゼントタイム 2007年10月号 9 - 10 ページより

Tim Jackins

翻訳 高坂明雄

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳 2008 年。原文 2007 年）。
この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。